南十字星創刊60周年記念　会員エッセイ

The Southern Cross 60th Anniversary Member Essays

会員の皆様より「日本人会と私の思い出」をテーマにしたエッセイをご応募いただきましたので、ご紹介させていただきます。

「よみがえる記憶」

自動ドアを開けて広がる開放的なロビー、包み込まれるような日本人会の懐かしい香り。20年前の思い出が次々とよみがえり、軽い興奮を覚えるとともにとても不思議な気持ちなった。父と母と来ていた場所に、自分が母となり自分の子どもと一緒に立っていることに。

2023年、不思議なご縁で二度目のシンガポール駐在生活が始まった。10歳で一度帰国した私にとって、シンガポールの風景は20年前のままで止まっていた。

まるでタイムスリップしたような感覚に陥った。ロビーに飾られた入賞した自分の絵の前で誇らしげに立っている自分。その姿を写真に収めようとする両親の姿。コミックルームで床に座っている人の足を踏まないように慎重に座る場所を探す自分。どんぐりで食べたいと父の手をひっぱる少女が目の前にいるかのように感じた。

一番大好きだったのはたくさんの絵本があった子ども図書室だ。20年ぶりの訪問では、意外にも「狭い」が第一印象となった。間取りの変更もあっただろうが、一番の理由、それは自分の体が大きくなったことだと気が付くと、20年の月日の流れをまるで数秒で経過したような不思議な気持ちになった。今の自分の子どもたちは広くて夢のような空間に感じているに違いない。時々、母に用事ができて2階の大人図書室へ向かうこともあった。静まりかえった大人なだけの特別な空間。子どもの自分が入ることに罪の意識を感じながら隠れるようにそっと母を探した。今の大人の私には理解しがたい感情だが、今も似た感情を抱いている子どもがいるのではないだろうか。

大運動会の記憶もとても鮮明だ。父と母がプログラムを覗き込み、出場する項目に印をつけてくれたことや、母が恥ずかしがりながらも「お米が欲しい」気持ちに押されて、お米を持ち上げる競技にでたこと、家族みんなで楽しめたあの時間は今でも思い出話の定番となっている。

南十字星に姉とのツーショットが掲載されたことがある。日本人会のイベントでチャイナ服を着てみかんをもっている写真だ。当時は、今のように気軽に写真が撮れる時代ではなく、掲載された写真を母が嬉しそうに切り取りアルバムに残していたことを覚えている。

幼少期のシンガポールでの思い出は私にとって大きな財産となった。自分の子どもたちはこれからどんな思い出をつくっていくのだろうか。20年後、大人になった子どもたちと、シンガポールの話をすることが今から楽しみである。

千嶋成美